

研究テーマ
「生徒が主体的に活動する作業学習を目指して」
～作業する意欲や喜びにつながる手だてとは～

1 研究の目的と方法

知的障害教育部門中学部では、作業学習において生徒の作業意欲を高め、主体的に行動する姿を増やすためのより良い支援のあり方を探ってきた。過去2年間の取り組みから、授業づくりや支援における大切なポイントとして以下の4つがあることが浮かび上がってきた。

- ① 「わかる」「できる」に向けた支援
- ② より広い意味での「わかる」に向けた支援
- ③ 従来の作業に新しい価値を付け加える活動や新しいことに挑戦する活動の設定
- ④ 生徒自身で実践する場面の設定と主体的な姿を促す教師のかかわり方

今年度は、上記4ポイントを基に各班が作業意欲の向上や主体的な姿の増加のための方策を考え実践することで、4ポイントの活用の有効性や配慮点について確認することを目的に研究した。

2 研究の実際（作業学習 メンテナンス&ガーデニング M G 1班）

(1) 対象生徒の実態等 と グループの研究仮説

【実態】

- ・清掃方法の理解不足がある。また、「きれい」についての具体的な基準を持っていない。

【主体的な姿】

- ・作業方法や正しい清掃手順がわかり、自信を持って自ら取り組む。

【研究仮説】

作業手順やその達成基準を具体的に示して清掃作業に取り組むことは、生徒の意欲を引き出し主体的に活動する姿を増やすことができる

【検証方法】

- ・清掃の所要時間の変化、清掃マスター検定結果の変化
- ・意欲や主体性に関係する生徒の言動の変化とその時の内面のあり様との関連について確認する

(2) 実践経過

てだて

① 「わかる」「できる」に向けた支援

- ・掃除の種類に応じた手順、方法の統一

例えば、拭き掃除は全体を一目で把握しやすい機の雑巾がけから取り組むことで、基本的な拭き方や手順の理解及び習熟を図りやすくする。その後、理解を応用してモップ清掃など他の拭き掃除に取り組む等、習熟に合わせて段階的に作業に取り組むことができる環境を準備した。〈図1〉

- ・清掃範囲や作業手順の可視化〈写真1〉
- ・映像を使った活動の振り返りによる具体的な評価の伝達と課題点の確認

② より広い意味での「わかる」に向けた支援

- ・高等部作業学習清掃班の見学

自分自身の将来の姿のイメージを具体的に持てるようにするために、中学部より高次の目標をもって専門的に取り組む高等部産業技術コースの作業学習清掃班の見学を行った。

③従来の作業に新しい価値を付け加える活動や新しいことに挑戦する活動の設定

- ・清掃技能の達成度を測り目標に挑戦する機会としての清掃マスター検定制度の設定

高等部技能検定をベースに中学部版清掃検定制度を考案した。モップ清掃、拭き清掃の2部門で行い、検定は10級～1級、名人の11段階で評価する。7級までの達成基準は初歩的な技術を細分化して設定することで、情報理解力の低い生徒においても習熟することで昇級でき成就感を味わう体験が持てるようにした。〈写真2、3〉

④生徒自身で実践する場面の設定と主体的な姿を促す教師のかかわり方

- ・生徒自身の気づきを促す見本の提示やメモの活用
- ・技術や作業態度に関する新たな目標に気付くための声かけ、示範



〈図1〉拭き掃除の手順

〈写真1〉手順の視覚化

〈写真2、3〉清掃マスター検定の様子

(3) 結果と考察

清掃場所	教室			トイレ		
日付	5/25	6/8	7/13	6/22	6/29	7/6
所要時間	90分	80分	65分	90分	80分	60分

(2)にある4ポイントに沿って、手立て、支援を考え、実践した結果、上記のとおり清掃所要時間が短縮し、技能検定の結果からは清掃方法への理解や技能の向上が確認できた。また、この成長の背景には、「しっかりきれいにしたい」「清掃技能を伸ばしたい」という気持ちを持ったことが生徒からの聞き取りでわかった。以上の結果から、仮説の有効性が確認された。

3 研究の成果

【成果】

今回取り組んだこの4ポイントは、作業学習における主体性向上のためのいわゆるマニュアルではないと考える。一人一人実態の異なる生徒が、場所と活動を共有しながら取り組む作業学習において、どうすれば生徒個々の主体性の向上へとつながるそれぞれの道筋を具体的に描くことができるのか。自信をつける、視野が広がる、意識が高まる、意欲が向上する、習熟する、挑戦する(自分をいかす)等、どのような過程を経ることが有効なのか。そして、その手立てとして活動をどう具体化するのか。この生徒によって異なるロードマップを教師が具体的に考えていく上での指針として、これら4ポイントは役立つしていくと考える。その上で以下の点を確認した。

- 生徒の実態や習熟度等を見極めながら①→②→③と活動を進め、適時④の支援、配慮を行っていく形で作業の計画や活動内容を考えることは、目的に対して効果的である。
- 4ポイントの実践における重要度、優先度は①>②>③>④であると考え。情報活用能力の高い生徒においては①≦②となることや、②についての習熟が新たな意欲へと結びつくことも見られたが、基本的にはまず①についての支援に丁寧に取り組むことが重要である。
- 障害の程度に関わらず其々の生徒が活動において自分の力を目一杯使って「考える」ことができるか、それを引き出す活動になっているか、ということが意欲や主体性の向上を目指す上で重要である。「考える」ことで自身をいかし、力を発揮しようとする姿につながっていく。故に「考える」活動に向けた「わかる・できる」為の支援も大切である。